

# アトピー性皮膚炎 診療ガイドライン2018の解説

京都府立医科大学大学院医学研究科皮膚科学 加藤 則人

## KEY WORDS

- Evidence-based medicine
- ステロイド外用薬
- タクロリムス
- 保湿外用剤

Commentary on Japanese clinical practice guidelines for the management of atopic dermatitis 2018.

Norito Katoh (教授)

## はじめに

アトピー性皮膚炎診療ガイドライン2018は、evidence-based medicine (EBM)の観点から現時点(原則として2015年12月末まで)における文献などをレビューし、日本国内のアトピー性皮膚炎の治療方針における目安や治療の目標など診療の道しるべを示し、診療の現場での意思決定の際に利用されることを想定して作成された<sup>1)</sup>。臨床現場での最終的な判断は、主治医が患者の価値観や治療に対する希望も十分に反映し、患者と協働して行わねばならない。本稿では、アトピー性皮膚炎診療ガイドライン2018(以下、本ガイドライン)のなかから、治療、特に外用療法の要点を紹介する。

## I. アトピー性皮膚炎の治療の意義<sup>1)</sup>

アトピー性皮膚炎では、痒い湿疹

(皮膚炎)が存在するために、皮膚バリア機能のさらなる低下や被刺激性の亢進、湿疹を掻破する刺激による悪化など、皮膚炎を悪化させる因子がますます増えていくという悪循環によって慢性化、難治化することを伝える。アトピー性皮膚炎の治療の3つの柱は、①薬物療法、②生理学的異常に対する外用療法・スキンケア、③悪化因子の検索と対策(図)<sup>1)</sup>だが、なかでも抗炎症外用薬を中心とした薬物療法は単なる対症療法にとどまらず、炎症を制御することによってさまざまな悪化因子を減らす意義があることを、患者や養育者に十分に理解してもらうことが大切である。

## II. アトピー性皮膚炎の治療の目標とゴール

慢性疾患の治療を開始する際には、今後の見通し、治療の目標とゴールを伝えることが大切である。本ガイドラ